

第18回 地域医療貢献奨励賞 受賞者（2024年度）

<敬称略>

<p>吉田 徹 (よしだ とおる)</p>	<p>岩手県 岩手県立中部病院[院長]</p>
<p>昭和59年自治医科大学卒。同年6月、岩手県の沿岸部に位置する県立宮古病院に着任。その後も県立山田病院、国保安代診療所と、医師不足の深刻な沿岸・県北地域を中心に活躍。平成20年から県立釜石病院の副院長を4年間務めた後、平成24年から県立千厩病院、県立久慈病院、県立宮古病院と院長を歴任され、現在は岩手県内で最大規模の県立中部病院の院長として勤務。</p> <p>県立千厩病院では回復期リハビリ病棟の開設により周辺病院から急性期治療を終了した症例を中心に受け入れるなど地域のリハビリテーション機能の維持に貢献。</p> <p>また県立久慈病院では、久慈病院としては初の病院公開イベントの開催、学生向けの職場体験や市民健康講演会などを通じて、病院への理解促進とともに地域住民の健康意識の醸成等、健康で安心して暮らせるまちづくりに貢献。</p> <p>近年は、病院管理者として病院機能の充実、地域医療の確保にも尽力され、信頼される病院づくりや住民の健康維持増進に寄与してきた功績は顕著であり、多くの住民から感謝と信頼の念を寄せられている。</p>	
<p>佐藤 俊浩 (さとう としひろ)</p>	<p>山形県 最上町立最上病院[院長]</p>
<p>平成元年山形大学大学院医学研究科卒。函館市立函館病院、公立学校共済組合東北中央病院および寒河江市立病院の勤務を経て、平成9年より最上町立最上病院に院長として勤務。</p> <p>以来27年にわたり、病院長のほか、併設の介護老人保健施設の施設長や「保険・医療・福祉」の一体化施設（ウエルネスプラザ）の所長として、日常の外来・入院診療に加え「夜間診療、訪問診療、訪問看護」の実施や「福祉と介護サービスの連携」など地域医療の向上と地域包括ケアシステムの構築に尽力。</p> <p>また、事業者や町民健診の実施等、予防医療面でも町民から絶大な信頼を得ているだけでなく、新型コロナウイルスの拡大時には、発熱外来の設置やコロナ患者の入院受け入れ、会場設置型・各施設でのワクチン接種など、新型コロナウイルスに対する町民の安心安全確保にも奔走。</p> <p>さらに自治医科大学卒業の研修医、山形大学医学部付属病院や山形県立中央病院等の卒後臨床研修指導医として後進医師の指導・育成にも尽力。</p> <p>温厚な人柄で町民からの信頼が厚く、へき地医療の確保に献身的に貢献。</p>	
<p>塚田 次郎 (つかだ じろう)</p>	<p>新潟県 医療法人社団 塚田こども医院[理事長]</p>
<p>昭和56年自治医科大学卒。在学中にご自身の育児のため学内に共同保育園を自ら設立。保育士3名での本格的な規模に発展させた経験を通して、子育ては親が孤立して行うものではなく、女性だけに責任を求めるものでもなく、社会との繋がりが必要だと痛感、小児科医を選択して自身のモチベーションとされる。</p> <p>義務年限中は新潟県立坂町病院で小児科医として勤務。義務年限終了後の平成2年に生まれ故郷の上越市で「塚田こども医院」を開業。</p> <p>以来、診療に邁進する傍ら、季節の注意事項や感染症情報などを解説する情報紙を毎月作成・配布し、平成11年に開設した医院ホームページでの情報発信や問合せメールへの返信など、子育てに関する親の不安を和らげることに尽力。</p> <p>また子育て支援策に関する上越市への働きかけの結果、平成9年の病後児保育事業開始へと結実。しかしながら独自の問題意識から、急性期を含む病児保育・病後児保育事業を平成13年に自己資金で開始。利用者は初年度157人から現在の年間4000人にまで発展させるなど、利用者から絶大な信頼を得る。</p> <p>このような地域に根ざした活動に対する理念と長年継続させる情熱は、まさに地域医療の代名詞といえる。</p>	

<p>垣田 秀治 (かきた ひではる)</p>	<p>京都府 国保京丹波町病院[院長]</p>
<p>昭和60年自治医科大学卒。京都府立医科大学附属病院、国保弥栄病院での勤務を経て、国保京丹波町病院の前身である国民健康保険瑞穂病院に着任、総合内科医として地域医療に注力。義務年限終了後も同院での勤務を継続、足かけ36年の長きにわたり、一貫して、この病院で地域住民の健康管理に尽力。</p> <p>自身の技量を磨きぬくことはもとより、土曜診療や関係診療所での夜間診療を開設し、自ら多数の患者の診察に従事。また、町の広報誌に健康情報をコラムとして執筆するとともに、町内外での健康活動に関する講演活動のみならず敬老会などでは三線演奏や沖縄民謡・舞踊を織り交ぜた楽しい健康教室を積極的にこなす。</p> <p>さらに、自治医科大学入学試験の一次試験（面接官）として将来の地域医療を担うに相応しい医学生を選定や実習・卒業生の受け入れなど後輩の指導や育成に尽力。初期臨床研修医の地域医療研修、内科専門医プログラム・総合診療専門医プログラムの専攻医を受け入れる取り組みにより、令和4年には同院が「地域総合診療専門医プログラム」の基幹病院として登録される。</p> <p>へき地・山間地勤務への情熱に支えられたこうした取り組みで、医師確保困難地域住民の健康維持や安心安全な社会基盤の維持に貢献し続けている。</p>	
<p>木谷 光博 (きたに みつひろ)</p>	<p>島根県 医療法人カタクリ会[理事長] (兼) 医療法人カタクリ会 よしか病院[院長]</p>
<p>昭和57年島根医科大学医学部卒。昭和61年に初任地として一度、津和野共存病院で勤務後、平成3年の益田赤十字病院着任以後、益田医療圏域内で地域医療に従事。</p> <p>平成23年、益田赤十字病院の常勤麻酔科医・産婦人科医の急減に伴う分娩取扱いが困難な状況にも立ち向かい、島根大学や島根県の支援のもと他県や島根大学から常勤産婦人科医を迎え入れ、地域に唯一の分娩取扱い可能な医療機関として継続。</p> <p>平成24年に院長就任後、益田医師会病院との機能連携、分担を進めることで益田赤十字病院を中心とした医療・介護連携体制を構築。また平成30年には、津和野共存病院の院長・副院長が不在となる事態にあたり、自ら陣頭指揮を執り、島根県へも働きかけ、益田赤十字病院から緊急的に医師を派遣することで難局を乗り切るとともに、綿密な経営分析から在宅系サービスの提供を中心とすること等を指導。</p> <p>また吉賀町唯一の病院が経営難に陥った際も、医療の灯を消さないため、町出資の医療法人カタクリ会を立ち上げ、一日の隙間もなくよしか病院の運営を開始。</p> <p>地域密着での永続、周辺医療機関との機能分担・広域的な連携により、地域の患者が地元の適切な医療機関で受診できるべきという病院に対する信念のもと、益田医療圏域の医療介護体制再構築に努めているその功績は極めて大きい。</p>	
<p>三浦 源太 (みうら げんた)</p>	<p>大分県 姫島村国保診療所[所長]</p>
<p>平成元年自治医科大学卒。平成12年まで大分県職員として県内のへき地診療所やへき地医療拠点病院で勤務。義務年限内の平成6年から平成9年までの3年間と義務年限終了後の平成12年から現在までの通算27年間余りを姫島村国民健康保険診療所で勤務。</p> <p>保健予防推進の面では、兼務する健康推進課課長として村民の健康診査・がん検診に力を入れ、村民の意識向上を実現するとともに、蓄積されたデータを日頃の診察でも活用し、予防と結びついた医療を実践。</p> <p>また診療所建物に併設・隣接する地域包括支援センターや高齢者生活福祉センターの指導を通じて、診療所を中心とした地域包括医療・ケア体制を整えることで一人一人の状態にあった医療・福祉サービス・介護サービスの提供にも尽力。</p> <p>さらに重症患者の対岸までの搬送や救急車への同伴などの安全な搬送体制の整備、年1回のヘリ搬送訓練実施といった救急医療の充実、医学生や臨床研修医の積極的な研修受け入れでの若手医師の育成といった地域医療研修などの面でも貢献。</p> <p>医療の質の向上および保健・医療・福祉の連携による地域包括医療・ケアを推進し、村民が住み慣れた姫島で安心して生活できる環境づくりに大きく貢献。</p>	